

容姿の美醜観念を解くには ～マーク・アグハールの作品から探る～

Exploring the Liberation from the Notion of Beauty and Ugliness Beyond Lookism through Mark Aguhar' s Artworks

人文科学系/ジェンダー美学/論文

芸術文化キュレーションコース

松永 瑠依

Matsunaga Rui

◎はじめに

本稿は、美の多様化が進む現在においても、ステレオタイプな美の規範が未だ存在し、依然として人々が容姿の美醜観念に囚われている現状を問題視し、そうした美醜観念を解くための手立てを探ろうとするものである。

◎容姿と社会

本章では、「外見」についての研究を重ねる社会学者・西倉実季による、フェミニズムにおける女性美・ルッキズム・容姿に関する個人的なナラティブといった観点における論を参照し、容姿と社会との関わりについて整理し把握した。フェミニズムは男性中心的社会構造の中で起こる性的差別や抑圧から女性を解放するための思想・運動であるが、そこで女性の美についても議論がなされてきた。西倉は美を男性支配による女性への抑圧の一要素とみなす社会決定論的な「抑圧としての美」とそれを通して女性性が構築される媒介として権力を理解する「規律実践的な美」の二つのパースペクティブに分けて論じ、両者に対し働き続けている社会/文化/制度である「美のシステム」の存在を明らかにしている。女性を抑圧する社会的な「美」の規範が、本来主体として美を实践するはずの女性に対し、依然として「呪縛」となって機能し続けている状況は、労働の現場におけるルッキズムの問題や、外見の美醜とそれにまつわるアイデンティティの問題に取り組んだ顔にあざのある女性のナラティブ分析から明らかにされている。

◎マーク・アグハールの身体表象

容姿についての考察を踏まえた上で、本章ではトランスジェンダーであり、クィアアーティストとしてオンライン上で活動したマーク・アグハールの作品から、アグハールの身体表象を分析している。ジェンダークィア（性自認が流動的である人を指す）であることに加え、有色人種、肥満体型など、自身のアイデンティティが、属した社会においてマイノリティとして扱われる中で、アグハールは芸術を通して、一貫してそれに抵抗する姿勢を見せている。アグハールが自らの身体を提示する作品では、加工や隠蔽を一切することなく、自らを装飾することでセルフケアとしての美を見出していることと、ジェンダー規範に従うことによる、身体の「男らしさ」「女らしさ」の概念に対する疑問を自らの身体によって投げかけていることが見て取れる。

◎身体への視座

アグハールの身体への視点を契機として、ジェンダーの観点から身体への新たな視座を提示するために、ジュディス・バトラーのジェンダー論とゲイル・サラモンによるトランスジェンダーの身体についての議論を参照した。

バトラーは、様々なフェミニズムの理論に応答しながら、生物学的性（セックス）・社会的性（ジェンダー）の捉え直しをおこなった。とはいえ、「女」とはなんであるのかという最終的な規定はせず、かといってカテゴリを打ち壊すこと・性差を無いものとしようとするわけでもない。子供を産む/産まない、男性の欲望の対象である/ない、あるいは人種や社会的階級、異性愛以外のセクシュアリティそして生物学的に雌とされる身体を持つ/持たない等、様々な差異があってもそのことはその人を「女ではない」と判断する根拠にはならない。それゆえにバトラーは「女の身体」の答えを決定せず、開放したままにしている。

サラモンはトランスジェンダーの身体経験を参照しつつ、現象学や精神分析における身体性の理論を読み直すことで身体を分析する。「性別化された身体」が本質的・物質的なものではなく、社会との関わりの中で構築されていく感覚であることを示す。同時に、そうした社会構築主義的身体と、生きられた身体は両義的なものであり、対立するものではないと主張する。

バトラーとサラモンの二者の論は、ジェンダーと物質的な身体の揺らぎを示している。これらの視点は容姿の美醜からの解放のための有効な議論を導くことになる。

◎おわりに

私が本稿をもって目指したところは、容姿にまつわる美を本質化せず、規範的に思われる美に対して私たちが不必要な劣等意識に苛まれることなく生きられるようになることである。そのために社会構築的な容姿の美の存在を確認し、容姿ひいては身体についての捉え方に新たな視座を持ち込んだ。私たちの容姿・身体は美醜で評価されるのではなく、ただ「ある」ように「ある」ことができるはずである。